

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02196

研究課題名（和文）子ども-環境相互作用に注目した社会的養護の基礎的・実践的研究

研究課題名（英文）Basic and Practical Research on Alternative Care for Children focusing on Child-Environment Interaction.

研究代表者

森 茂起 (MORI, SHIGEYUKI)

甲南大学・文学部・特別研究員

研究者番号：00174368

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,100,000円

研究成果の概要（和文）：児童福祉施設に暮らす子ども及び虐待を受けた子どもたちへの心理学的援助のあり方を、より根拠あるものとするために、HOME（Home Observation for Measurement of the Environment）児童福祉施設版、MCAST（アタッチメント評価技法）、認知発達調査技法の三つの評価技法を、日本の実践に活用できるレベルまで整備することを目的として活動した。認知評価技法を用いた、児童養護施設と一般家庭の子どもの比較研究を踏まえ、児童福祉施設におけるHOME実践のモデル形成事業、心理療法実践家へのMCAST評定者資格取得者養成を踏まえた実践への活用を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が導入を試みたHOMEおよびMCASTは、子どもの養育環境およびアタッチメント形成の質を実証研究に基づく基準によって評価する方法である。厚生労働省が提示した「新しい社会的養育ビジョン」が求める「家庭的養育」の検討に今後用いることができる。得られた結果は、児童福祉施設における養育環境を、子ども一人一人に個別に実現することの重要性を示すものであり、今後の実践に生かすことができる。MCASTは子どものアタッチメントの質を精密に理解することで、養育および治療に活用することができる。いずれにおいても実践家を含む研究会を組織して進めてきたため、今後の実践の展開の足場を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：In order to provide more evidence-based practice to children living in child welfare facilities and children who have been abused, we have been working to develop Japanese versions of three assessment techniques that can be used by Japanese practitioners. HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) for child welfare facilities, MCAST (Manchester Child Attachment Story Task), a technique for assessing attachment, and techniques for assessing cognitive development. After conducting comparative research on cognitive character of children under out-of-home care and children at home, we conducted two projects. One is the HOME project with child welfare institutions in Kobe to use it as an intervention tool and as an useful technique for training practitioners. The other is the MCAST project, where practitioners were trained to be registered as its raters and MCAST was conducted for psychotherapeutic cases at Center for Child Abuse Prevention in Tokyo.

研究分野：臨床心理学・児童福祉

キーワード：児童福祉施設 成育環境 アタッチメント HOME（環境評価様式） MCAST 児童福祉施設職員研修

1. 研究開始当初の背景

子どもを社会の手で育てる社会的養護が、近年新たな展開を見せてきた。家庭的養育の重要性を謳う国際連合代替養育ガイドライン (UN Guideline for the Alternative Care of Children, 2010) の影響も受け、「社会的養護の課題と将来像」(2013, 厚生労働省) が提示され、「家庭的養護の推進」のための児童養護施設の小規模化 (地域小規模施設、グループホーム増設、施設のユニット化) と、里親制度の拡充、ファミリーホーム制度の設置などが進められてきた。2016 年の児童福祉法改正によってさらに制度改革をの検討が進められるはずであった。そのなかで、児童福祉施設は、被虐待児など特別な配慮を必要とする子どもの養育の場として、地域子育て支援拠点として、里親支援の担い手として、子育ての専門性を高めていくことが求められていた。これまで「里親か施設か」という対立構造で捉えられる傾向のあった両者だが (Bowlby, 1951; Rutter et al., 1998; Zeanah, et al., 2005)、子育て・子育てに必要な要素に関する一元的な理解の元で、里親家庭と児童福祉施設両者の子育ての質向上と相互連携が求められていおり、そのための具体的方法論が必要であった。質の低下による問題発生以前に、促進的に質向上を図る検証と介入によって、施設間、里親家庭間の格差発生の予防を図ることが重要である。

子育て・子育てに必要な要素を捉える視点は多様だが、子どもと (養育者を含む) 環境の相互作用を理解することが必要という点で、保育、教育、心理、養護などいずれの領域においても見解が一致している。しかし児童相談所等の判定機能は、知的発達、人格などの定点観察が基本になっており、それらに基づく子どもと環境の相互作用の見極めは、判定者、実践家の個人的技量に委ねられていたことから、子どもと環境の相互作用を客観的に検証し、実践に還元するための方法が求められていた。その課題の中で、たとえばアタッチメント研究に基づく実践が行われるなど、乳幼児期の養育に関しては根拠に基づく実践が広がっていたが、特に、乳幼児期から思春期への重要な成長が進む児童期及び前思春期については、客観的な評価の手法が不足していた。

その現状を踏まえ本研究で行った、A) 成育環境の評価、B) 対人関係、C) 過去の逆境体験も含む背景要因の三つの要素に関する子どもの評価方法の検討に関して、開始当時は次のような状況であった。

A) 生育環境の評価技法には、HOME [Home Observation for Measurement of the Environment] (Caldwell & Bradley, 2003; 安梅, 2009) があり、本研究チームが先に実施した科研事業 (基盤 B 「児童養護施設入所児に見られる諸問題の成因に関する研究」, 以下「前科研」と記す) で、家庭版 HOME と同じ視点に立って必要な修正を加えた児童養護施設前思春期版を作成した。同事業による成果の研究成果の発表準備が進められていた (Lau, Zhang, Tanaka, Anme, Mori, & Bradley, 2018; Zhang, Cecil, Barker, Mori, & Lau, 2018)。また、同技法を児童福祉施設の実践に活用する方法論の検討が課題であった。里親養育に生かす方法の検討も課題であった。

B) 子どもの育ちにとって重要な対人関係の質を評価するための視点として、本研究では、「アタッチメント」(幼児期～学童期) と「対人態度」および「対人情動認知」(学童期～思春期) を取り上げた。アタッチメント理論は子どもと養育者 (および重要な他者) の関わりを考える上で最も重要な理論であり、さまざまな評価様式がすでに開発されていた。社会的養護に適用するには、幼児への標準的評価技法の SST (Strange Situation Test) があるが簡便性に欠けることと、対象特異的アタッチメントしか測れないことに課題があった。また、児童には標準的評価法が存在しなかった。その中で、幼児については実践経験から必要性が認識されているアタッチメント障害尺度があり (徳山・森田・菊池, 2010)、児童期用には、近年開発され、本研究チームのメンバーがすでに試行していた、ドールプレイによる実践的評価技法、MCAST [Manchester Children Attachment Story Test] (Green, et al., 2000) があった。

児童期、思春期の子どもでは、養育者だけでなく友人関係を含む幅広い対人的環境が成育決定因の重要な要素となるが、子どもに対人関係を問うことは、不安 (伝えることによる影響への不安など) によるバイアスが発生しやすい。その限界を克服するため、実験的手法による「対人態度」(大浦他, 2016) および「情動認知」(島, 福井, 他 2012; 松尾他, 2016) の測定が試みられていた。また、「表情の読み取り (表情の情動認知)」や「表情への注意」に注目し、表情刺激 (写真) を用いた実験的方法によって、不適切な養育が社会適応に負の影響を与えることを確認する研究が行われていた (Koizumi & Takagishi, 2014; Pollak, et al., 2000 他)。これらの手法はゲーム感覚で実施できるため、日本の社会的養護、あるいは虐待を受けた子どもに、質問紙よりも負担をかけず実施できる点、及び実際に対人関係に影響を与えている要因を確認することができる点で、利用可能と思われた。

C) 社会的養護のもとで暮らす子どもの背景要因を理解するには、過去の成育史 (逆境的环境) と家族との交流状況を把握し、問題の成因を理解していく必要がある。先行研究では「無家庭」、「家庭機能不全」、「経済状況低下」といった大きなカテゴリーで成育史を把握したのものがあるものの (Vorria et al., 1998) 良質性の程度を把握することができていなかった。先の研究 (森代表科研) で施設職員が持つ情報から背景情報を把握する様式を作成して逆境的体験の程度を評価したが (Lau, Zhang, Tanaka, Anme, Mori, & Bradley, 2018; Zhang, Cecil, Barker, Mori, & Lau, 2018)、子ども自身に聞くことを含めてその質を評価することが必要という判断に至っていた。そのた

め、「成育史における逆境の体験」と「家族交流状況」の質を把握する評価様式を、国際的虐待カテゴリーも用いて作成する試みを行っていたものの、内容、方法の両者の点で課題が残っていた。

2. 研究の目的

虐待問題を背景に、日本の社会的養護は、施設養護と里親の適切な役割分担およびそれぞれの質向上が強く求められている。本研究の目的は、社会的養護における「根拠に基づく実践」を実現するための基盤を築くことである。そのために必要な子どもの理解を、子どもと（養育者を含む）環境の相互作用に絞り、A)「環境」、B)「対人関係」に関して、「愛着（アタッチメント）」および「対人認知発達」を客観的にかつ実践に使える形で評価する技法を整備する。児童養護施設および里親家庭を対象として、子育て環境評価技法、アタッチメント評価技法、（対人認知を含む）認知発達評価技法のそれぞれを、国際的にすでに使用されている技法を日本の実践現場で用いることができる形で導入する。C)子どもの成育史、家族関係という背景の質を、社会的養護の現場で使用できる形で評価する様式を整備する。

A) B) C) について以下を達成する。A) 今回のチームが既に行った科研プロジェクト HOME 前思春期施設版の既存データの統合による標準化を終えるとともに、児童期施設版、児童期里親版の作成を行う。B) アタッチメント評価のための子どものアタッチメント評価技法 MCAST 日本版、およびアタッチメント障害尺度を作成する。潜在的対人態度と表情の情動認知を子どもに行う実験的課題を作成し、児童養護施設において使用して、子どもの他の特性との相関関係を検討する。C) 成育史における逆境の体験、（施設の場合）入所中体験、原家族との交流状況を正確に把握するための質問紙を完成する。以上に基づき、子どもの環境、他者との相互交流の質、成育史および家族交流の相互関係を検討する。またそれと同時に、子どもの評価結果を施設職員ないし里親と共有し、養育の質向上につなげる介入実践を行い、効果検証を行う。

これらを通し、社会的養護を受ける子どもの物理的、社会的環境との関わりを、確立された技法と知見に基づいて多角的、総合的に評価し、根拠に基づく介入に結びつける準備をする。本研究に必要な専門性と実践技量を十分備えた専門家からなる研究チームによって、高い質の社会的養護を実現するための基礎データと方法論を蓄積する。得られるデータと介入実践によって、幅広い子育て支援、児童相談所の機能、児童福祉施設の子育て拠点機能などに知見を提供し、虐待（不適切な養育）予防の強化に貢献する。さらに、日本の社会的養護の質を検証するデータによって、国際的議論において聞かれる日本の社会的養護への批判に対して、根拠に基づいた主張を可能にする。日本の児童養護施設は、入所年齢、養護形態、入所期間の多様性の点で、世界に類を見ないものであること、メンバーのこれまでの研究が国際学会から注目されていることを背景に、施設養育と里親養育の比較を含め、あるべき「代替養育」に向けた国際的議論に資料を提供する。

3. 研究の方法

A) 子育て環境については、物理的環境も含めた成育環境と子どもの「関わり」を評価するため、本申請チームのメンバーによって製作された児童養護施設前思春期版、HOME を実践現場において用いるための実践研究を実施した。

HOME を児童養護施設等の児童福祉施設で実践的に使用方法には、外部者による使用、施設職員などの内部者による使用の両者が可能であり、さらに方法や目的で分けると次のような可能性がある。1) 外部者による実施による第三者評価的使用、2) スーパービジョンの一環としての使用、3) 研修や実践の見直しのための使用、4) 特定の子どもの理解のための使用。本研究では、1) 及び 3) を試行的に行い、その効果を検証する実践研究を計画した。ただし、1) については、協力児童福祉施設と計画を進め、評価者研修を終えた段階で、新型コロナウイルスの流行によって継続が困難になった。その結果、実施段階では 3) に絞り、協力関係を形成した神戸市児童養護施設連盟に所属する児童福祉施設の職員を構成員とする研究会を立ち上げ、オンライン会議、オンライン研修を用いながら以下のような実践研究を行った。

まず、対面による HOME 面接の研修をオンラインで実施する方法を検討し、研修を実施した。次に、児童福祉施設（児童心理治療施設を含む）の職員（心理職を含む）に対し、HOME 実施法の研修を実施した。その後、評定者（2名で構成）が自身の所属施設外の施設を訪問（新型コロナウイルス流行期にあったため、十分な感染予防をしつつ実施）HOME 評価実施、2名の合議による評価、2~4週後の結果フィードバック（訪問による担当職員面接）を行った。実施の際には、評定者および担当職員に、面接に対する思い、感情等を問う自由記述式アンケート用紙への記入を求めた。全ての過程において、施設職員の「子どもの成育環境」への理解を深めるための研究会を定期的に催した。

当初計画においては、評価対象を拡大するため、児童養護施設児童版、里親版の作成を目指していたが、コロナ禍による前思春期施設版を用いた実践研究の遅れのため、その作成に至らなかった。

B) 対人関係については、標準的なアタッチメントの評価様式がない中で有望な技法である MCAST を活用できる体制を整えるための研究を行った。そのために必須の作業として、現在までのところ、開発者グループ（Manchester 大学）から講師を招いて行った実施者トレーニングの

みにとどまっていたことから、評価資格を持つ実施者を複数育てる活動を行なった。子どもの虐待防止センター（CCAP）の心理職を中心に児童福祉施設心理職も加え、研究会を重ねながら資格取得のための作業を行なった。並行して、同センターにおいて、子どもの心理療法のためのアセスメント技法として MCAST を用い、資格取得前から、臨床実践への有効活用を試みた。十分な数の評価者要請を終えたのちに、日本の子どもを対象にした場合の MCAST の妥当性を確認することを一つの目的として、児童福祉施設に入所している子どもと在宅の子どもの比較研究を実施した。乳幼児のアタッチメントに関しては、評価技法としてすでに開発されているアタッチメント問題行動質問紙(数井・遠藤, 2008)によってアタッチメントを評価する試みを行った。

計画していた「対人態度」および「対人情動認知」(学童期～思春期)の測定を児童福祉施設で暮らす子どもたちのアタッチメント評価に用いる試みは、諸々の事情によって実現に至らなかった。

C)の子どもの成育史、家族関係等の背景の質(逆境体験の質)を評価する様式については、A)B)の実施に伴って準備する方針であった。しかし、その内容の検討の中で別の形での展開が見られたため、「研究成果」の項に記す。

全主題を通した研究体制は、「私立大学研究基盤形成支援事業」の援助を受けて形成した甲南大学人間科学研究所の機能を用いながら、全体を代表者(森)が統括した。研究代表者および研究分担者は、福祉(西澤、森)、心理(森、福井、北川、西澤、徳山、海野、遠藤)、保健(安梅)、医療(田中)の専門的立場から社会的養護および子育て支援、あるいは子どもの育ち研究に関わってきている。HOMEに関しては当技法の日本への紹介者(安梅)、MCASTに関してはアタッチメント研究者(北川)が分担者としてその知見を生かした。それぞれの主題の日本を代表する研究者によって研究の水準を確保しながら、海外の研究者との連携では、前科研から協力関係を築いていた Zhang, Lau 両氏と連携した。

4. 研究成果

A) 子育て環境

2018年度までに、前科研の成果を論文化した(Lau, Zhang, Tanaka, Anme, Mori, & Bradley, 2018; Zhang, Cecil, Barker, Mori, & Lau, 2018)。論文化のための一般家庭群への追加調査も行なった。日本の児童養護施設を対象とした、現在の成育環境、過去の逆境体験、現在の情緒的健康の関連の検証に一定の成果を得た。

論文化によって一定の成果を公表したこと、C)の課題である評価方法の改善に時間を要することの両者の理由から、本研究では、児童福祉施設における HOME の実践的使用のモデル形成に集中した。

「研究の方法」の項に記した方法によって、神戸市の児童福祉施設職員をメンバーとする研究会の活動として、施設間を相互に訪問して HOME 面接を行い、フィードバックを行った。その活動を、最終年度に日本子ども虐待防止学会での公募シンポジウムにおける発表、及び甲南大学で開催した公開報告会によって公開し、活動の拡大、HOME 実践の普及を図った。それらに参加した児童相談所、児童養護施設、弁護士など、社会的養護、子どもの人権擁護の専門家から使用に関する問い合わせがあり、今後の普及への足掛かりとなった。同学会における報告は継続的に行う予定である。前科研において作成した HOME 実施マニュアルを学会、研究会、研修会で活用し、普及へとつなげている。

HOME 実践を通して、児童福祉施設の職員に対する研修と子どもの成育環境の改善の両者の点で強力な技法であり、かつ外部者による介入ではなく施設職員が主体的に取り組み日頃の実践を見直す機会になる点で、従来の手法にない強みがあることが確認された。「背景」の項に記述した「家庭的養育」は、現在ますます重要になってきている。しかし、児童養護施設が実現すべき「家庭的養育」の内実が明確化されているとは言えない。家庭版に起源がある HOME 評価を実践することで、施設の日常の中で意識されない家庭との相違に気づき、職員が施設環境を見る目が変わることを経験した。

「職員の見える目が変わる」と表現したような数量化が困難な部分も含め、成果を公表することができていないが、まず進めるべき課題として、実施の際に重ねてきたアンケート調査及びインタビューの結果を、今後の実践も含めて質的に分析し論文化する予定である。また、本事業中に行った HOME の実践活動については今年度中に報告書をまとめる予定である。

B) 対人関係

MCAST の評価者資格を 6 名の協力者が取得し、過去に子どもに実施した結果を評価する作業を進めた。特に D 型アタッチメントの評価において資格取得前と異なった判断が生じる例が見出され、子どもの解離の多様な現れ方を精密に評価できるようになった。

児童福祉施設に入所している子どもと地域で生活する子どもの比較研究の暫定的結果では、安定型が地域群に多く、無秩序型が施設群に多かった(日本子ども虐待防止学会, 2023 で発表予定)。地域/施設という成育環境以外の要因も考慮に入れて検討することが今後必要だが、現段階では MCAST によるアタッチメント評価の妥当性を示す結果と思われる。

心理療法のためのアセスメントの技法として用いる実践研究においては、治療の前後におけ

るアタッチメントの差異を確認することができる経験を重ねており、今後さらに詳細な事例検討によって、MCASTの実施による治療への寄与の詳細を明らかにすることが課題となっている。

資格取得、妥当性検討、実践研究と進めてきたことで、重要でありながら評価する方法が不足していた児童期アタッチメントの研究、実践の応用に重要な技法を加えることができた。科研事業による研究会、日本子ども虐待防止学会における公募シンポジウムにおいて、科研メンバー外の児童期アタッチメントの研究者も参加して他の技法との差異などの検討を重ねてきた。MCASTによる評価を通して、解離の多様な形を認識しD型(無秩序型)のアタッチメントを見極めることの重要性が認識された。被虐待の影響が身体症状となって現れることも多く、医療において精神科以外の診療科と被虐待の作用の理解を共有しながら連携することの重要性も指摘された(海野, 2022)。

乳幼児のアタッチメントを評価するアタッチメント問題行動質問紙(数井・遠藤, 2008)の使用は、児童養護施設、乳児院の入所児及び里親のもとで暮らしている子どもに関する調査を行い(徳山) ADHD・解離、および養育者の自己効力感との関連を検討した。担当職員との関わりにおけるアタッチメント行動を把握することが、子どもの理解に寄与すると思われた。結果を国際学会(European Society for Trauma and Dissociation, 2019)において発表し、海外の研究者との議論を行った。

C) 評価様式の整備

上記A)に述べた論文化の過程で、子どもの逆境体験の評価方法に、子ども自身が答える自記式あるいは面接による様式が含まれていないことが本研究の限界であることが明らかになった。背景要因の評価方法についてさらに検討する作業は、C)の課題として本研究の計画に組み込まれていた課題である。論文化の過程で明確になったことは、子どもの背景情報を実証研究に用いるには、子ども自身に回答を求める評価方法が必要であることである。前段階の研究では、福祉サービスの中で得られている情報、施設職員が把握している情報を総合して評価したが、その客観性の限界、重要な情報が欠如している可能性という限界があった。他方で、前研究の経験では、質問紙にせよインタビューにせよ、外部の調査者が子どもに負担をかける回答を求めることは、保護責任者である児童相談所、あるいは施設の管理者からの許諾を得ることが困難であった。今後の研究のためには、子どもに負担をかけない形で子ども自身に回答を求める簡便な方法の考案が不可欠であると思われた。

その検討作業と並行して、代表者(森)の下で研究する博士後期課程学生(本研究協力者)が、Childhood Trauma Questionnaire (CTQ) 日本語版の妥当性検証の作業に取り組んでいた。合衆国において開発されたCTQは、子どもが受けた不適切な養育を、子どもに直接回答を求める自記式様式によって客観的に評価するためのツールであり、子どもに負担をかけない項目数であること、妥当性、信頼性の検証を経ていること、すでに広範に用いられていることなどから、有効な評価方法と思われた。ただし、すでに日本語版作成の試みがあるものの、妥当性の検証が行われていなかった。今後の研究において国際比較に耐えられる点から見ても、新しい様式を作成するよりCTQ日本語版の妥当性検証を終えることが重要であると思われた。本研究の内部で行われた作業ではないものの、代表者の指導の下で本研究事業と連携しつつ進められ、完成に至った(Mizuki & Fujiwara, Validation of the Japanese version of the Childhood Trauma Questionnaire—Short Form (CTQ-J). *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy*, 13(5), 2021, 537-544)。今後の実証研究に貢献するものと考えられる成果である。

研究成果のまとめ

本研究は、前科研(2012-2016年度)の成果を生かしながら、より実践に直結する評価技法の実践への導入を図ったものである。当初の計画と比較すると、研究期間中に発生した代表者の事情及び新型コロナウイルス流行によって、相当程度の計画変更を余儀なくされた。その結果、2年の延長を経て、オンラインでの研究会、研修会の活用、子どもとの面接の際の感染予防の徹底など、対策を講じながら、計画した評価技法の導入、普及の中核的な部分が達成された。

本事業の中で、HOME [Home Observation for Measurement of the Environment] の児童養護施設前思春期版、MCAST [Manchester Children Attachment Story Test]、乳幼児対象のアタッチメント問題行動質問紙の実践的使用の価値が確認され、普及のための実践家養成、継続的に実践を行う実践家グループと、今後の展開のためのシステムが形成された。それを基盤にさらに実践を展開していくことが今後の課題である。

実践を通して得られたデータは、学会で一部が発表されたものの、分析作業の多くと、その結果の学会発表、論文化の作業が残されている。2023年度に予定されているHOME、MCASTそれぞれに関する2つの学会発表も含め、研究期間に形成された研究者、実践家のネットワークの中でその作業を行っていくことが今後の課題である。

C)の逆境的背景の評価様式については、協力者の連携研究によって今後の使用に足る段階に至ったものの、児童福祉領域において調査研究を行うためには、評価様式の整備だけでなく、十分な倫理的配慮の下に、その役割を担う機関の主導によって、子どもへの支援のために必要な調査に限って実施することが重要である。前科研の経験も含め、そうした倫理的配慮に基づく研究のあり方についての議論が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 海野千畝子	4. 巻 (61)1
2. 論文標題 子ども専門病院での心理士による虐待対応院内システムづくり - トraumainfo - ムドケア・システム アプロ - チからの振り返り	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Etsuko Tomisaki, Emiko Tanaka, Taeko Watanabe, Ryoji Shinohara, Maki Hirano, Yoko Onda, Yukiko Mochizuki, Yuko Yato, Noriko Yamakawa, Tokie Anme	4. 巻 6
2. 論文標題 The relationship between the development of social competence and sleep in infants: a longitudinal study	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Child and Adolescent Psychiatry and Mental health	6. 最初と最後の頁 52-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13034-018-0258-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北川恵	4. 巻 199
2. 論文標題 育児困難を支える親子関係支援の実践 - 誰もが「安心感」を求めている	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北川恵	4. 巻 49
2. 論文標題 親子関係支援から見たアタッチメント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 82-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中究	4. 巻 198
2. 論文標題 愛着理論・研究の現在 精神科臨床においてアタッチメントを考える 児童期から成人期まで	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuning Zhang, Emiko Tanaka, Tokie Anne, Shigeyuki Mori, Robert Bradley, & Jennifer YF Lau.	4. 巻 91
2. 論文標題 Japanese residential care quality and perceived competency in institutionalized adolescents: A preliminary assessment of the dimensionality of care provision.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Children and Youth Services Review	6. 最初と最後の頁 204-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.chilidyouth.2018.05.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田中究	4. 巻 204
2. 論文標題 子どもの"困った"感情 感情の問題への専門的ケア 感情がない、わからないというとき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北川恵	4. 巻 22
2. 論文標題 子どもの「安心基地」になる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuning Zhang, Charlotte C. A. M. Cecil, Edward D. Barker, Shigeyuki Mori, & Jennifer Y. F. Lau	4. 巻 50
2. 論文標題 Dimensionality of Early Adversity and Associated Behavioral and Emotional Symptoms: Data from a Sample of Japanese Institutionalized Children and Adolescents.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Child Psychiatry & Human Development	6. 最初と最後の頁 425-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10578-018-0850-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤慶子, 田中笑子, 渡邊久実, 渡辺多恵子, 富崎悦子, 安梅勅江	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 就学前の子どもの睡眠リズムと就労する養育者のストレスに関する研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本保健福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安梅勅江	4. 巻 20
2. 論文標題 子育て子育てエンパワメント ~コホート研究から~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigeyuki Mori, Satoru Nishizawa, Arimi Kimura	4. 巻 9(1)
2. 論文標題 Reconsidering recent developments in Japanese residential care and the road to FICE Japan.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Child, Youth & Family Studies	6. 最初と最後の頁 121-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18357/ijcyfs91201818123	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中究	4. 巻 48-2
2. 論文標題 愛着の課題を臨床で考える時 愛着障害をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日精診ジャーナル	6. 最初と最後の頁 155-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中究	4. 巻 62-1
2. 論文標題 子どもの解離とトラウマ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎仁・田中究	4. 巻 36-1
2. 論文標題 児童期のマルチトリートメントがこころの発達に及ぼす影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 北川 恵
2. 発表標題 アタッチメント理論の臨床的活用
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森茂起・西澤哲・水木理恵・若松亜希子・中尾達馬
2. 発表標題 Manchester Child Attachment Story Taskを使った児童期のアタッチメントの測定
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tokie Anme
2. 発表標題 Community Empowerment with "Dynamic Synergy Model"
3. 学会等名 Systems Sciences for Health Social Services (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tokie Anme
2. 発表標題 Community Empowerment: Inclusive Model.
3. 学会等名 Immigration and Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺 多恵子、田中笑子、 富崎悦子、 澤田優子、 渡邊久実、安梅勅江
2. 発表標題 育児状況の18年間の推移と子ども虐待リスクと関係する要因の検討
3. 学会等名 公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤田 優子、田中 笑子、渡邊 久実、渡辺多恵子、河西敏幸、伊藤澄雄、奥村理加、安梅勅江
2. 発表標題 学童期の主観的体力リスク低減と育児環境との関連
3. 学会等名 公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北川恵
2. 発表標題 アタッチメント - 子どもの安心の基地を作る
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海野千畝子
2. 発表標題 里親家庭における動物介在療法-里親里子クライシスからの転機
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森茂起
2. 発表標題 ソーシャルペダゴジーとFICE
3. 学会等名 日本ソーシャルペダゴジー学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigeyuki Mori
2. 発表標題 Deconstructing the notion of “Asian Oedipus” : Focusing on an unwanted child.
3. 学会等名 International Psychoanalytical Association, Asia-Pacific Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森茂起
2. 発表標題 虐待からの回復と対話: 困難な人生史という資源
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森茂起、西森啓祐、井上琢也、水木理恵
2. 発表標題 子ども一人ひとりに適した施設環境について考える : 神戸市におけるHOME評価尺度導入の取り組み
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Michiyo Tokuyama & Hajime Tanabe
2. 発表標題 Dissociation in Infants in Social Care.
3. 学会等名 European Society for Trauma and Dissociation (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

<p>1. 著者名 遠藤利彦（編著）、本島優子・中尾達馬・大久保圭介・石 遠藤利彦（編著）、本島優子・中尾達馬・大久保圭介・石井悠・北川恵・平田悠里・篠原郁子・金政祐司・数井みゆき・堤かおり・森田展彰</p>	<p>4. 発行年 2021年</p>
<p>2. 出版社 日本評論社</p>	<p>5. 総ページ数 251</p>
<p>3. 書名 入門アタッチメント理論：臨床・実践への架け橋</p>	
<p>1. 著者名 和田晃尚・森茂起</p>	<p>4. 発行年 2021年</p>
<p>2. 出版社 星和書店,</p>	<p>5. 総ページ数 16</p>
<p>3. 書名 児童福祉領域におけるアセスメント. 『トラウマセラピーのためのアセスメントハンドブック』</p>	
<p>1. 著者名 森茂起</p>	<p>4. 発行年 2021年</p>
<p>2. 出版社 日本評論社</p>	<p>5. 総ページ数 20</p>
<p>3. 書名 ナラティブ・エクスポージャー・セラピーの活用と工夫 『複雑性PTSDの臨床実践ガイド ト라우マ焦点化治療の活用と工夫』</p>	
<p>1. 著者名 Tanaka E, Tomisaki E, Watanabe T, Sawada Y, Anme T</p>	<p>4. 発行年 2019年</p>
<p>2. 出版社 Nova Science Publications</p>	<p>5. 総ページ数 14</p>
<p>3. 書名 The "Dynamic Synergy Model for Empowerment"</p>	

1. 著者名 Tokie Anme	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Nova Science Publications	5. 総ページ数 10
3. 書名 The "Dynamic Synergy Model for Empowerment". Interactive Community Empowerment program and Adaptation of ICT for Health Promotion: Life Course Approach with Longitudinal Cohort Study	

1. 著者名 海野千畝子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 267
3. 書名 増補改訂版子ども虐待への心理臨床：病的解離・愛着・EMDR・動物介在療法まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安梅 勅江 (Anme Tokie) (20201907)	筑波大学・医学医療系・教授 (12102)	
研究分担者	田中 究 (Tanaka Kiwamu) (20273790)	神戸大学・医学研究科・非常勤講師 (14501)	
研究分担者	福井 義一 (Fukui Yosikazu) (20368400)	甲南大学・文学部・教授 (34506)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	海野 千畝子 (Unno Chihoko) (30584875)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	
研究分担者	徳山 美知代 (Tokuyama Michiyo) (70537604)	東京成徳大学・応用心理学部・教授 (32521)	
研究分担者	遠藤 利彦 (Endou Toshihiko) (90242106)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授 (12601)	
研究分担者	西澤 哲 (Nisizawa Satoru) (90277658)	山梨県立大学・人間福祉学部・教授 (23503)	
研究分担者	北川 恵 (Kitagawa Megumi) (90309360)	甲南大学・文学部・教授 (34506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関